

あを 10
2019





寂寂と泉の声
東日に聴く
遠く泉の声
目薬を差しをり

あそ

十月



須賀忠男

東京 佐藤 喜孝

てふになり

てふになり花になつたり日の永し
夕雨は長息でまた柿の花
香水にシースルーエレベーターまだ上へ
水に出て直線に飛ぶ黒揚羽
独裁もデモクラシーも冷奴
露西亞名の長くて暑し文學座
顔暑し耳目そのほか貼りつけて
秋暑し顔にいろんなもの付けて
線香花火あたりつやつやしてきたる
長谷川一夫のお向ひお傳秋の晝
蓄へし光を放つ夕薄



東京 田中 藤穂

萩の露

夜の地震盆提灯に目をやりぬ
七夕の老人ホーム静かなり
風草や戦時を共にせし学友
鱗雲 敗戦よりの長き時
さらさらと物忘れして萩の露

三重 長崎 桂子

八月

今朝も又カアカアと鴉の子
梅雨寒や容赦なき雨破壊する
敗戦日昭和の悲惨老にけり
復員の故郷無になり敗戦忌
戦時下の竹筋コンクリート敗戦忌

東京 森 なほ子

今朝の秋

鉤の脚子の手に掛けて大兜虫
葉がくれに長茄子黒きこと一尺
エアコンと我身励まし今朝の秋
泣いてゐし子を黙らせて蟻の列
露天湯に山蟻一つ吹き入るる

埼玉 山莊 慶子

病室

優しさにつつまれて羞ず雷遠く
病室の会話明るし雲の峰
点滴の管カラフルや梅雨明け
病室の窓辺にそそぐ西日濃し
衣更ふこともなく空移ろへり



東京

赤座 典子

秋暑し

朝上り色深めぬし葛の花
秋の田に一枚毎の黄金色
街道の墓傷み初む男郎花
台風裡家居の腕に時計して
秋暑し群れて水浴ぶ街の鳩

埼玉

秋川 泉

夏とデイープリンパクト

ひとひとり通らぬ今日の炎暑かな
雨上り夜も更けたる笹かざり
嘶きて雲の峰飛び駿馬逝く
夏座敷奥の夕闇風の抜け
黙々と黒長靴が草を刈る

埼玉

大日向幸江

遠嶺

暑中見舞絵手紙に書く遠嶺かな
目の前に開く花火や展望台
遠花火両手広げて受け止めし
Gパンの藍清清し海の日の
桃を買ふ包丁たたぬ未熟桃

東京

七郎衛門吉保

秋めく

秋めきて帽子を少し重くして
肩隠す肌掛け二枚今朝の秋
焚く香を白檀に変へ今日の秋
ピーラーで剥ぎひらひらと新生姜
秋暑し鬼っ子おかきにアップルティ



残暑

東京

篠田 純子

嵩の無き垂乳根団扇にて凌ぐ
竜胆を活け心身の鎮もれり
後ろ手にホック外しぬ秋暑し
金髪の後毛はゆし藍浴衣
アルパカの尿長々と秋の雲

石川

定梶じょう

昼の月

蟻走る遠きサイレン正午なり
水盤を四海と思ひ目高かな
赤ん坊這ひ出してゐる昼寝かな
いぶかしむ残暑見舞に追って書き
昼の月欠けてゐる方いとほしむ

長岡花火大会

東京

須賀 敏子

向日葵の少し優しき迷路かな
長閑なる日々ありてこそ大花火
バス下りて皆歩き出す大花火
新涼や湯呑みに煎茶たっぷりと
図書館で黙禱 八月十五日

佐藤 恭子

仙台坂

クローバの花をとびこしつまづける
顔の穴いくつか数ふ暑に耐えて
仙台坂の下からバスに夏日浴び
湧水に水輪重なる万緑理裡
背高泡立草だうした日本は合はないか



日の落ちてなほ日をとどむ櫻かな 佐藤喜孝

一冊に短編十二夏の月 須賀敏子

竹落葉銀の蒔絵となる静寂 田中藤穂

医者へゆき庭掃き夏至のまだ暮れず 田中藤穂

舟虫や流木めぐり隠れたり 長崎桂子

葉に沿うて曲がつてゆきぬ蝸牛 森なほ子

白燦々青はせつなし大花火 赤座典子



唐黍や朝靄の中動くもの 秋川 泉

曲り角媪が掛けるサングラス 大日向幸江

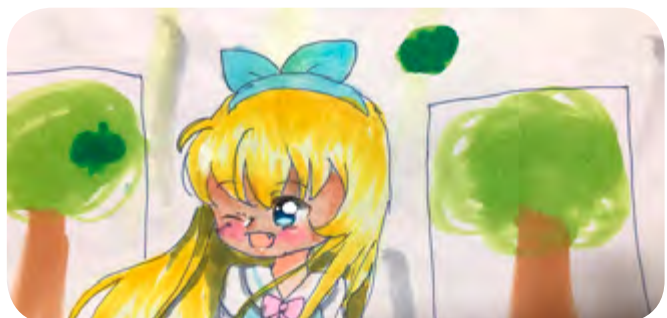
逆上り見得を切る子の玉の汗 七郎衛門吉保

家鳴りぴし関節コキと梅雨長し 篠田純子

豆腐屋のらっぱ高らか巴里祭 定梶じょう

細波のめぐりめぐりて梅雨の鳩 佐藤恭子

喜孝抄



水平線氣に入って描け春夕焼

佐藤 喜孝

「出身のアイオワ州は地平線に囲まれているが、日本には地平線がないのが残念」とコメントする米国人女性を紹介したTV番組を見た記憶がある。地平線はないが水平線には囲まれている日本。その水平線と夕焼を組み合わせた絵は、誰にでも思い描くことが出来る。春夕焼・夕焼・秋夕焼・冬夕焼・寒夕焼と一年を通して対象となるが、作者は春夕焼をよしとするのであろう。(吉保)

宇江佐真理読んでて月を見そこなふ

佐藤 喜孝

北海道の函館を拠点に活躍された宇江佐真理さんは、私も大好きな作家です。人情味豊かな時代小説に描かれている、他人を思いやって生きていく様子に、温かい気持ちになりました。宇江佐さんの本は、大事なことを忘れたりしないように、いつも時間を作ってから読む様にしてみました。作者も、月を見ようと思っていたのに、気が付いたら時が過ぎてしまっていた。とてもよく分かる状況です。宇江佐さんは昨年急逝されました。とても残念です。(典子)

貯水池の水の緊張黒揚羽

定梶じょう

渇水時に水を補充するための人工の池である貯水池。通常は静かに存在しているそこに、突然黒揚羽が現れ、水面が波立った。作者はそれを黒揚羽の襲来に池が緊張していると表現された。突然の事態の、池の落ち着かなさが伝わってきます。すつきりとした光景が浮かびます。(典子)

松蟬やほったらかしの湯に入る

須賀 敏子

春休み夏休みになると、祖父の住む山梨県日下部町(現山梨市)に毎年のように遊びに行つた。ほったらかしの湯は、その山梨市にあるので身近に感じる温泉である。山の中腹にある露天の浴槽から、甲府盆地を見下ろし、富士山を遠望する景は正に絶景となる。山の麓には笛吹川が流れる。歌にも詠まれるさしでの磯と、巨木の松林が広がる万力公園があり、松蟬の棲家も多い。(吉保)

夏帽や東京駅の変り様

田中 藤穂

東京駅の、赤レンガ丸の内駅舎の様には変わりはない。他方で八重洲口側は、ここ数年再開発が続いている。その様変わりには、地下商店街は勿論のこと、高層ビルが林立した地上の風景を、日々変え続けている。変わらぬ赤レンガ駅舎と、その上空の日々変わるビル群とのコントラストを、日陰の少ない丸の内側の、駅前広場から、夏帽をかぶって見上げている、作者が見えてきた。(吉保)

青嵐電柱西へ傾けり

長崎 桂子

青葉の頃の風が強く吹いて、日の沈む西の方向へ電柱を傾けさせてしまった。作者の実際に見られた風景なのでしょうか、「西」が効いています。他の方角よりも風情が感じられますよね。今年の秋には、信じられないほどの沢山の電柱が倒されてしまいました。青嵐の句でほっとしています。(典子)

雨に散る紅ばらの横白あぢさゐ 森 なほ子

紫陽花、別名七変化とあるように、花の色の変化と多様性が、この花の存在を高めているのではなからうか。愛用本には紫陽花の句が五十七句も掲載されているが、この重要な「色」を読み込んだ句は。たったの三句しかなかった。しかし作者は、大胆にその色を詠み込んで一句としている。しかも、雨に散る紅色と白とを直截に対比させて、「あぢさゐ」の存在を高めている。(吉保)

いくたびも席を譲られ六月果つ 赤座 典子

電車やバスなどで人生初めて席を譲られた時の驚きと云つたらない。それからは、どうしたら声を掛けられないで済むかと、立ち居振る舞、服装などに注意を払ったものだ。それがいつの間やら無駄な抵抗はしなくなってしまった。

掲句はそんなことに拘らずに表現してあるやうに見える。が、自分ではまだまだ若いつもりであるのにこの月は何度「どうぞ」と声を掛けられたことだらう、と不満に思っているのである。「六月果つ」と閉めた滋味ある佳句。

日の暮れて紫陽花の青浮き上がり 秋川 泉

七変化とも言われるこの花の色は咲き初めは青い色。その最初の瑞々しい青色が、日が落ちると凄みを帯びて浮き上がって見える。その存在をしつかりと捉えて句に作られました。何事も見落とさない泉さん、流石です。(典子)

梅雨晴れや筆筥一棹断捨離す 大日向幸江

ウイキペディアで断捨離を調べてみた。「もつたない」という固定観念で固まった心を、ヨーガの行法の断行・捨行・離行により解放し、身軽で快適な人生と生活を手に入れる。とあり二〇〇九年頃から一般に知られるようになった、新しい言葉とのこと。云うは易く行うは難し、の断捨離。筆筥一棹分を成し遂げた作者はあっぱれ。正しく梅雨晴れ間違いないの所業。(吉保)

雪笹を緑濃く茹で緑雨かな 七郎衛門吉保

緑・緑と読んでゐる目の前が緑になる。これだけ緑が溢れてゐるのにくどい表現ではない。珍しい山菜が吉保さんの句によく登場する。「雪笹」は「鹿藿」とも書くらしい。実は有毒だが若芽は美味と辞書にはあったが、歳時記では見つからなかった。(喜孝)

雪溪に摘みし雪笹朝の卓 竹尾志眞子
一叢の雨余の雪笹花立てて 清水伊代乃

夏のアルパカ頭のみふさふさ逆上せまいか 篠田 純子

以前那須へ旅行した時に、アルパカ二頭が牧場の宣伝係りで、バス停を散歩していました。くりくりと丸いのに垂れ目で、とても愛くるしい姿でした。頭だけを残して刈り込まれて、内心怒り寸前なのではと、純子さんの感想です。今回もですが、思いもよらない発想の句はいつもとても楽しみです。(典子)



常夜鍋

須賀敏子

我家で一番多く作るのは「常夜鍋」です。基本は豚の薄切り肉とホーレン草ですが、我家は豆腐とえのき茸も用意します。お酒を加えたお湯でしゃぶしゃぶして、ポン酢醬油でいただきます。さっぱりとして毎晩食べても飽きない鍋であることから「常夜鍋」と呼ばれるようになったそうです。



雨の降る

定権じょう

「雨がふる」を「雨のふる」と表せば、現代語では詠嘆表現。口語を駆使する現代川柳では「雨のふる」を不可とします。

そんなことも影響しているのでしょうか、俳句のことばはほとんど通俗化している、むしろ陳腐化とっていいかもしれません。川柳でも、きちんとして結杜のことは遣いは俳句と変わらない。省略語、和製英語を使うのはきちんとしてない結杜です。

誤解しないでほしいのは、文語文法すなわち学校文法に従って句は作るべき、と言っているのではないことです。

森なほ子さんに「へビニ傘の相合傘の浴衣の娘」があつて、私はこれを否定しました。「へビニールの相合傘の浴衣かな」で句になるはず、と思ったからです。しつかりした句を作るなほ子さんを知っているだけに意外でした。

「コンビニ」の語などもそんなことばの最たるものでしょうか。

かつて、俳句、川柳を作つてそれはそれは器用な方がいらつしやいました。「一生に一度、へコンビニ エンス・ストア」の語をつかつて句歌川柳を仕上げたい」と仰有つてましたが、願いが適ったかどうかは住まう地を異にしたため知らないのが残念ですけれど、易しくない。しかしその方ならあるいは。少なくとも、川柳だから「コンビニエンス・ストア」を「コンビニ」と略することしなかつた方でした。

スキヤキ

大日向幸江

私は基本的に鍋料理は苦手だ。
もしスキヤキも鍋と言うとこれは大好きだ。中でもまったり柔かく火の入った深谷葱が美味で止められない。それと割り下の味は甘みの強いものより、普通の平均的な味が嬉しい。肉にはあまり拘らないが外国産でも日本産でも柔らかければ良い。

最後に私は料理が得意ではない人の作った物はなんでも食べる



年越

秋川 泉

元日の夜は、鍋に決まっている。
里の山寺に家族が揃う。修正会の護摩と大般若。その後の檀家の方々との宴。その片付け。全てを済ませて、初めて家族一同が新年の膳を囲む。和やかに集い語らう。父母の在る間は「河豚鍋」。次の代になって「九絵鍋」。これは一年にただ一度、元日の夜のみの私の里の風習である。私にとり「好きな鍋料理」はこの一事につきる。



佐藤喜孝

田中 藤穂

校長室前の百合の木夏休
雨過ぎてきれいな日暮夏逝くか
糠漬けの秋茄子うまし亡母の顔

◎百合の木は高くなる。夏休のころにはもう花は終り、あの絆纏の形をした葉を茂らせてゐるだらう。「校長室前」と的確に場所を設定し、そこに大木の百合の木を配した。それだけで夏休の校庭の様子が印象深く浮かび上がる。

◎タモリ氏がテレビで道の脇の紫陽花を綺麗に咲いてゐますねと褒め、そして高校生の頃は桜が咲いてゐやうがなんとも思はなかった、と述懐してゐた。イグアナのタモリが云ふと重みがある。

藤穂さんは「時」を手放して「きれいな日暮」と感じてをられる。この句、ただ雨が降ったといふ

ことだけなのに……。」「夏逝くか」は去り行く夏への呼びかけのやうに聞こえた。

◎前二句に比しこの句は付録。この句に限らぬが、亡母・妣は俳句表現に使ふことに疑問を持つてゐる。この句でも「母」のみの方かと思ふ。個人の好みもあるので無理強いは出来ないが、亡父・考^{カウ}を含めさう思ふ。

長崎 桂子

いづくより庭へ白百合いくた嬉嬉

朝蟬や今日はじめよと催促す

歎喜に鳴く朝午後二時に蟬の殻

◎庭に白百合が咲いた。植ゑた覚えがない。いつの間にか芽生え花を付けた。嬉しくて嬉しくて、と喜びを書いてゐる。作者の喜びは分かるが、「いくた」と似てゐる「いくたび」を使ひ「いづくよりの白百合庭に幾たびも」で「嬉嬉」の代はりをさせることも出来る。余りよい添削でないが表現方法として。

◎桂子さんは確か私と同じくひとり暮らしだと思ふ。自由すぎて自分に弾みを付けて一日を始める。朝から元気な蟬との会話もする。朝の蟬ではと思つたが蟬の音が温和しくなつてしまひ止めた。

◎朝は命を謳歌してゐた蟬が午後二時には蟬の殻になつてゐたと云ふ意か。「蟬の殻」は空蟬のこと。なので時間が逆走してしまふ。どこかで読み間違えてゐるのだらう。ムクロといふ意味で

「蟬の殻」としたのかも知れないと思つたのだが…………。

鳴き立ててつくつく法師死ぬる日ぞ

夏目 漱石

森 なほ子

上の子は叱られ役よ水鉄砲

暑さうな顔を見てゐる暑さかな

北国の古きホテルや夏の雨

◎今に始まつたことでない。いつの世も親は安易に上の子を窘めてしまふ。子育て中はついつい忙しさに紛れこのやうになりがち。作者はこの親子のやりとりを少し離れ冷静にみてゐる。すこし新味に欠けるのが惜しい。

◎「暑さ」の二乗でなんとも暑い句である。「暑さ」そのものを表現してゐる意欲作。

◎「北国」は分かつたやうで曖昧な語。辞書ではだう書かれてゐるか興味が湧いた。「北の国。北方の土地。きたぐに。」と曖昧。起点が書かれてゐないからである。まあ、関東より北を北国といふのがわたしの常識だが、北海道は？。この句も「北国」は具体的に何所を指してゐるわけではない。南国・西国とは違ふ雰囲気期待しての言葉。なほ子俳句のルーツを垣間見えた一句。

皓々と玻璃を広げる盆の月
越後の句色失はぬ小茄子漬
法師蟬のクレッシェンドに急かさるる

◎「玻璃を広げる」で読むのに躓いた。玻璃そのものが広がるとイメージしたが？。窓を広げる、ではとも考へたが、「皓皓と」とうまく繋がらない。いつも感嘆する作者の感覚だがこの作は表現が躓いてゆけないのか、またはわたしの読解力が力足らずかも知れぬ。分かる人にはわたしの悩みが不思議なことだらう。知恵の輪を解いた人と解けない人の差である。

◎漬物の茄子は色が大切。わが家の茄子漬けもすぐに色が変わってしまった。何か秘訣があるのだろうか。この句もその辺りを詠んでゐる。

◎鳴き声からツクツクホーシと称べられたらしい。「つくつくほうしのなくをききて我宿のつまはねよくやおもふらん」とか、古来好まれた蟬の鳴き方のやう。蝸とはまた違ふ趣があるが、両蟬ともここ数年聞く機会がない。急迫で『ボレロ』のやうに同じ旋律を繰り返すのを聞いてみると、確かに切迫感に襲はれる。当の蟬もおのれの声に励まされ一段と声を張り上げるやうだ。「クレッシェンド」に匹敵する大和言葉は何であらうか。

庭桜 大きな洞に秋の風
初秋や風吹きぬける大樹跡
大樹伐り庭に広がる秋の空

◎「庭桜」は中国原産の小低木、ニワウメが大方の辞書。広辞苑だけは「庭前に植えた桜」とあった。作者は広辞苑の説明の意で使はれたと思ふ。「家桜」といふ語彙もある。毎日見る庭の桜も秋には色づき落葉する。時の移ろひを目にすると、殊更秋風が身に沁みる。といふやうな思ひを裏に秘め、淡淡と詠まれてゐるところがよい。

◎いつも通つてゐる道にぼかんと空き地出来てゐる。そこにどんな家が建つてゐたのか思ひ出せないことが多々ある。

更地ここ何だつたつけ猫ぢやらし

辻 美奈子

と同調者がゐて呉れた。

この句の大樹はことある毎に仰いだのであらう。風が過ぎ春、夏と命を謳歌し秋になった。しかしいまはその大樹の在りし辺りを初秋の風がただ吹きぬけてゐる。この句も前句と同じく感情を抑へてゐて好感を持った。

◎前二句と同じ感情の句だとおもふが、読者はさう取らないかもしれぬ。邪魔な大樹を切り清々し

たと云ふ意に読める。『庭に淋しく』などと形容詞で直截に述べれば情を伝へるのに難しくはないのだが……。『大樹伐りただ広げれる秋の空』でも十全ではない。

大日向幸江

長崎や 限界集落 黙しをり
グウと出しパツと開きぬ 曼珠沙華
祭り果て心静かに次を待つ

◎無季俳句である。「長崎や」は季語に比する重さになってゐない。ここは数歩下がって、「長崎の限界集落木守柿」などと。勿論別の季語でも構はない。

◎曼珠沙華の句は多く作られてゐる。別名である『死人花・彼岸花』などの影響を『曼珠沙華』は被つてゐる句をよく見かける。この句ほどドライに曼珠沙華の花の咲きやうを正確に写生した句は珍しい。見事な作品である。

◎俳句表現はある意味で独りよがりである。これがないと平凡な句になりがち。この句の「次を待つ」がわからない。作者にはよく分かつてゐるのだが。

七郎富吉保

空蟬に似る 兄見舞ふ 夕間暮
省りみる 今日の 贅沢終戦日
時移る 男日傘とゲリラ豪雨あめ

◎『空蟬に似る』人を見舞はれた。どういふ病状なのだらう。わたしには見舞ひに來られた人が誰であるのか分からぬような病状に読める。「兄」であればなほ辛い。句中の「空蟬」は季語として扱はず、「夕間暮」をしつかり季語を据ゑることにより空蟬も生きてくるとおもふ。

◎終戦日の一日をかえりみる。「省みる」は「顧みる」とはおもむきが異なる。「省みる」は作者の誠実さのあらはれである。贅沢と云つても食べ物のことだけではない。衣食住全てである。

◎男の人が日傘をさす時代になった。雨も夕立などと洒落てはゐられない。温暖化と一言で片付けるには余りに変化が激しい。

わたしのデータベースでは二〇〇二年十一月号の『風土』の

男日傘今日もかざしてああ秋暑 小林清之介

が最初である。因みにほかの句では

銀座行く男がさせる日傘かな

青木政江

200909

影つれし男の日傘遠ざかる	大西 順子	201012
日傘して男の歩幅広くなり	太田 健嗣	201211
紳士めく男の日傘街を行く	小林 久子	201311
したり顔にくき男の秋日傘	山根 征子	201311
番傘の気分で日傘男子かな	仲里 貞義	201909
瓜の花日傘男子の見つめをり	赤松 赤彦	201909
交差点渡る男の日傘かな	廣瀬 雅男	201910
アドバリン男も日傘さす銀座	山崎 稔子	201910

と今年になつて増えてきた。男女の別なく男の日傘に興味があるやうだ。

篠田 純子

九月一日小まめに洗ふ皿ちゃわん
扇風機で鳴らす風鈴団地夫
帰省子のLAINピザはすこすこのすこ

(すこすこのすこは好きの絵文字)

◎心に残る大きな出来事があつた日を、そのことを直接云はず日付で表現することはよくある。ツーと云へばカーで通じる。

持ち歩く葉月半ばの籠杖

松崎 豊

はいまもころに残る。純子さんには九月一日の出来事は祖父母などから聞かれたのだらう。語り継がれる自然災害の甚大さを思ふにつけ、この平凡とも見える日々を大切にせねばと改めて思った一句である。「小まめに」がそのことを伝えてゐる。

◎これだけ隣が接した町のなかでは風鈴の音さへ騒音と云はれかねないご時世。風鈴の音を愉しむには大邸宅が必要か。天然の風と云ふ訳にはゆかぬが、指で吊した風鈴を扇風機の風にあてるのも新しい風流やもしれぬ。

◎新語・流行語を積極的に俳句へ採り入れる人と、無視する人と分れる。若い人は無視と云ふ訳にゆかないが、高齢者と烙印を押された年代は二手に分かれる。作者はまだ若いので前者。「すこすこのすこ」は投句欄外に注があり。ネットで確かめてみた。「すきすきすき」といふことらしい。今は家族間でも電話よりLAINやメールを使ふことがある。「帰省子」といふ死語に近い語彙と組み合はせることで作者の意図を垣間見た。注が付かなくとも通じる新語なら「賞味期限」も少しはあるとおもふが、この語はある世代しか通じぬ隠語で終はりさうだ。

定楯じょう

渋団扇こんな所にさしはさみ
八月十五日未明の烏賊火はも
致死量のほどなる摘んで山椒の実

◎「柿渋を表面に塗った団扇。丈夫なので、火をおこすときなどに使った。夏の季語」と。涼味はないがなかなかの働き者である。団扇を探してゐたのか、たまたまおやこんな所にと気がついたのか、をかしく思った。「置かれ」ではなく「さしはさみ」がじょうさんの俳句。

◎あれから何年経ったのか。わたしの年齢からマイナス4で答が出るが、その歳すら曖昧になってきた。もう物心が付いてゐてもよい年齢だが全く八月十五日の記憶がない。親からも聞きぞびれてしまった。陸で見る烏賊火は幻想的である。函館の宿で一晩中見てゐた。この句の烏賊火はもうすぐ仕事がお仕舞いになる未明。要らぬことだが気象用語で未明は午前三時出さうだ。作者は「はも」一語におもひを込める。定型を外した上での「はも」は印象的であった。

◎致死量ときくとなにかおどろおどろしいが、この句はさうではなく俳味溢るる句である。今、香辛料としてパクチーとか山椒がもてはやされてゐるとか。山椒の実の豊穣を、致死量のほどなる、とは面白い。

須賀 敏子

秋茜遭難の碑に羽根休め

河骨と睡蓮そして蓮咲けり

片陰知事選挙を選び近くの投票所

◎秋茜は季節によって生活の場所を変へる人なつっこいトンボ。「遭難の碑」でもよいが、遭難にもさまざまな経緯がある。水難・海難、山でも遭難碑がある。少しアバウトかな。

◎なんとも極楽のやうな所である。余りの美事にただただ言葉を並べてしまった。芭蕉作と云ふ俗説の「ああ松島や松島や」のそれに近い。名詞を並べても立派な作品もあるのだが……。

◎十七音で完結しなければならぬと知りつつ、伝へたい事柄がその中に収まらないとつい前書に手を出す。この句は「投票所」へ行くのであるから選挙であることは自明。知事選であらうが国政選挙であらうが句意には余り関係ない。又、投票場は大方住居の近くに設置される。

敏子さんは政治に関心が深いお方。次はその思ひで作られた作品を読みたい。たとへ作品として破綻してゐても。

中川句寿夫さんをしのんで 三

酒提げて来て屋根替を手伝へり
 新涼やネクタイしめて人に会ふ
 新藁の穂もて作りし筈かな
 梯子かけてゆがむ庇や黍を干す
 出来秋の米で買ひたる内証もの
 朝市に売る楽しみの大根洗ふ
 ぜんざいも出て分校の雪下し
 声がしたやうで筍置いてあり
 出穂はや倒伏ところどころかな
 鰯雲能登も広しと思ひけり



句寿夫さんの日常生活への工夫に、ご家族と、地区の方々への気配り、そして愛しさが溢れてゐるのを感じます。
 かつてわたしも体験した、隣人との温かい数々のお付き合いを、懐かしく思い出しました。住んでいらつしやうた能登への愛着と愛情に常日頃からの努力を重ねていらつしやる御様子が伺ひ出来て、なお深い深い責任をお持ちでの御生活と拝察いたしました。

長崎桂子 抄

あをキーワード俳句辞典(はちーはち)

八

われ八十大きめして恥ずかしや
 八幡に十の願ひや七五三
 八ヶ岳浮びて枝垂糸桜
 醍醐寺や百八十年の花に酔ふ
 八階の売場へ金魚昇りゆく
 店先に水仙を置く八百屋かな
 春スキー苗場谷川八海山
 八幡の急な石段蟻登る
 南無八百屋お七の墓の白あぢさゐ
 白玉のつるり喉越しお八つ時
 湿度八十余梅雨を這ふ元気者
 八方の秋の彩り濃く淡き
 そよそよと八丈富士に芒かな
 やつと抜けて八幡詣恵方道
 つつがなく八十三の春を待つ
 夜盗虫八部までかな他人の幸
 一入と八入の混じる紅葉山
 十三陵八達嶺と旅はじめ
 展望の百八十度初茜
 燕一閃八十といふ誕生日
 寒星や八犬伝をうろおぼえ
 銀座八丁けだるく芽吹きそめしかな

芝 尚子
 鎌倉喜久恵
 須賀 敏子
 須賀 敏子
 竹内 弘子
 鎌倉喜久恵
 須賀 敏子
 芝 尚子
 芝 尚子
 長崎 桂子
 長崎 桂子
 長崎 桂子
 長崎 桂子
 須賀 敏子
 鎌倉喜久恵
 芝 尚子
 石森 理和
 長崎 桂子
 堀内 一郎
 堀内 一郎
 田中 藤穂
 篠田 純子

八甲田兵の碑法師蟬
 八の坂三味も流れて過去の冬
 八十やつるべ落しの年の坂
 枯れ枯れて四の坂八の坂見ゆる
 半纏は祖母の形見の黄八丈
 木の芽雨島の娘の黄八丈
 ぼうたんや京間八疊廣びると
 青嵐道は六百八十里
 八十二の母の予定簿神無月
 左から廻る八の字茅の輪かな
 オワンクラゲ秋冷八十五万匹
 百八つ煩惱祓ひ淑気かな
 薺粥八順過ごす丑の母
 春寒し八階屋上露天風呂
 籐座椅子八海山麓蕎麦処
 八脚門仁王納めて青葉閣
 はさまうかつつくべきか八つ頭
 燈台が見える畠の八つ頭
 二八や統飯に指をとられけり
 戸の隙間光差す大和八州誕生
 十国峠関八州は梅雨の中
 八十歳八十本のスイトピー
 もみぢ山の後ろ八海山黒し

鈴木多枝子
 堀内 一郎
 鎌倉喜久恵
 堀内 一郎
 鎌倉喜久恵
 田中 藤穂
 芝 尚子
 堀内 一郎
 齊藤 裕子
 須賀 敏子
 藤野 寿子
 鎌倉喜久恵
 石森 理和
 藤野 寿子
 赤座 典子
 鎌倉喜久恵
 定梶 じょう
 定梶 じょう
 佐藤 恭子
 長崎 桂子
 石森 理和
 鎌倉喜久恵
 竹内 弘子

八卦見の視線をそらす柳の芽
節電の銀座八丁人涼し
片耳にピアス八個やアロハシャツ
秋もはや八十五才ハーマモニカ
梅はまだ九八屋は閉ざされてあり
沫雪や酒亭九八屋たれも居ず
八方の池の漣峰粧ふ
北風や自転車の稚児眉八の字
赤鳥居八本までの木下闇
湿度八十蚊取線香に燐寸擦る
直情や白梅うぶごゑ三八銃
飛魚を見れば八丈島近づきぬ
佃から八丁堀へ虹の橋
八角四角ビルの谷間の日向ぼこ
環八より初富士くきり初墓参
八甲田兵士の姿夏の檜葉
掻き暮れる六八九亡き後のこと
八割が想ひ出の身を初湯かな
行き渡る風は隅田か花八分
雪とけて八海山の怒り肩
茗荷の子三日つづきの七つ八つ
臘八会われにはまざと開戦日
八王子中央高速山桜

篠田 純子
篠田 純子
鎌倉喜久恵
堀内 一郎
田中 藤穂
田中 藤穂
須賀 敏子
齊藤 裕子
大日向幸江
長崎 桂子
佐藤 喜孝
須賀 敏子
篠田 純子
佐藤 恭子
齊藤 裕子
七郎衛門吉保
佐藤 恭子
赤座 典子
黒澤 佳子
大日向幸江
田中 藤穂
須賀 敏子

八時間掛けて初旅ラムネの湯
赤信号渡りきる婆環八春
鉢
痛き膝折りてながめる挿木鉢
ふるさとを語る珊瑚や金魚鉢
鉢植の木犀にほふ侘び住み
冬帽子鉢のひらきし頭をかくす
青春の君とわれ居し春火鉢
鉢植で売られてをりし蓮華草
骨董市法外な値の金魚鉢
冬ぬくし鉢花増える路地住まひ
黄水仙鉢の寸土のほか持たず
金魚鉢女にもある正念場
鉢植の茄子もかざりぬ盆の棚
真上からまよこから見る金魚鉢
鉢僧鉢なめをりし梅雨の駅
鉢僧大くさめして門に立つ
行き来する路地の鉢にも梅咲きぬ
鉢仕事蜂のうるつく身のまはり
植木鉢の底ひに蟻の湧き出ぬ
植糸かへの鉢の下には蟻の道
あめんぼうリンクとなせる手水鉢
猩猩木一と鉢に足る聖夜なり

石森 理和
森 なほ子
河合 笑子
赤座 典子
山莊 慶子
竹内 弘子
田中 藤穂
山莊 慶子
赤座 典子
山莊 慶子
後藤 志づ
田中 藤穂
関口 ゆき
佐藤 恭子
山莊 慶子
鎌倉喜久恵
鈴木多枝子
長崎 桂子
芝 尚子
齊藤 裕子
長崎 桂子
田中 藤穂

枯鉢に新たな芽や今朝のこと
ひと鉢の水遣り楽しカーネーション
挿鉢をおさへてゐたる母の日来
端午の日鉢を割りたる根の力
植木鉢右往左往の台風圏
きはちすの白き小鉢に紅の芯
鉢植の茄子紺まぶし唐辛子
仮宿や寝惑ふ朝の手水鉢
きのふより水をつめたき金魚鉢
さくら草鉢いづばいに種こぼれ
鉢の土新しくして種時きぬ
こしかたを想ふ眼となり春火鉢
夏のからす羽撃ちて植木鉢落す
鉢植のトマト弾ける真昼どき
驟雨下の鉢のぼうふら右往左往
窓口の常のやりとり鉢竜胆
子を送り鉢の植糸かへ秋麗
強東風や托鉢僧の二重顎
花あせび乾切つたる手水鉢
フロントにもてなしの鉢青林檎
祝電に紫陽花の鉢添へくれし
挿鉢へ妻よ母の日ひざまずく
一鉢より伸びたる鉄線窓格子

須賀 敏子
齊藤 裕子
竹内 弘子
田中 藤穂
早崎 泰江
赤座 典子
赤座 典子
佐藤 恭子
竹内 弘子
齊藤 裕子
早崎 泰江
鎌倉喜久恵
竹内 弘子
鈴木多枝子
定梶じよう
赤座 典子
齊藤 裕子
佐藤 恭子
赤座 典子
赤座 典子
鎌倉喜久恵
定梶じよう
齊藤 裕子

終業日鉢の朝顔持ち帰る
托鉢や深雪のポストかへりみる
朝顔市迷ひ求めし鉢ひとつ
残飯といふものなし火鉢かな
反り返る鯛を押へ瀬戸火鉢
四温晴鉢植え抱へ満たされて
植木鉢伏せて穴あり日脚伸ぶ
光より来て水鉢に春の鳥
店先に春火鉢出す峠茶屋
藁囲ひせし鉢の木瓜時に覗く
路地裏の鉢にぼつぼつ冬芽萌ゆ
陽を追ひて鉢植廻す浅き春
鉢植を今朝は四温の置きどころ
コスモスを二鉢買ひてつづく道
菊脛二輪小鉢へ浮かせ置く
家ごとに鉢を並べてカーネーション
春鴉羽撃ちて植木鉢落す
納まりよく鉢の隅からすみれ草
白清く一輪残る鉢の菊
花水木托鉢僧の列に逢ふ
朝の客朝顔市の鉢提げて
団子虫鉢の底からぬすみ出る
七鉢の蘭蓄ある除夜の鐘

石森 理和
定梶じよう
堀内 一郎
佐藤 喜孝
田中 藤穂
長崎 桂子
定梶じよう
田中 藤穂
鎌倉喜久恵
定梶じよう
長崎 桂子
山莊 慶子
長崎 桂子
山莊 慶子
堀内 一郎
石森 理和
山莊 慶子
竹内 弘子
齊藤 裕子
赤座 典子
篠田 純子
田中 藤穂
佐藤 恭子
田中 藤穂

あとがき

先月号の表紙写真

説明の要る写真でした。空に飛んでゐるのは立体のカイトです。新しく売り出された鳥威し的一种。まだ売り出されたばかりだそうです。竿に糸で結ばれた鳶は風がないと田に伏せてゐます。朝その状態で見ただけでなんだろうと思ひましたが。風が出てきたら大活躍です。空に舞ひ上がった鳶は暫く田を睥睨しています。そのうちきつかけは分かりませんが、田の面に急降下します。暫くすると又飛び立ち田を見張ります。雀は近くの電線や枝にゐて騒いでゐますが下りてきません。なかなかの働き者です。北海道の北斗市で見ました。検索すればネットで動画を見られます。

八月号訂正

宇佐江真理讀んでて月を見そこなふ 佐藤喜孝

今月号の赤座典子さんが、訂正して採りあげていただいた。わたしの間違へには一言も触れず、粹なもの

である。正しくは

宇佐江真理讀んでて月を見そこなふ

である。彼女の小説に辰巳芸者が出てくる。親しい人の挨拶に「ままくったかえ」といふ台詞がある。どう云ふわけかこの台詞にやられてしまった。

雨

今中野区に大雨警報がでてゐます。被災地の上に降り注ぐ雨を思ふと天が恨めしくなります。(喜孝)

二〇一九年十月号

発行日 十月二十五日

発行所 東京都中野区中央2・50・3

電話 090 9828 4244

ファックス 03 3371 4623

印刷・製本・レイアウト 竹僊房

カット/須賀忠男・福井美佐子・テイリ エイマ 表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共) / 一年

ゆうちょ銀行(普) (店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)